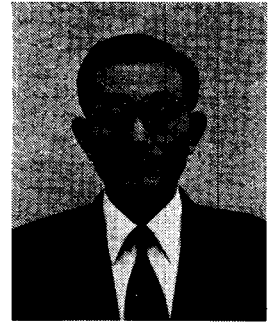


1989年の年頭にあたって

日本オペレーションズ・リサーチ学会会長

東京工業大学 森村 英典



新しい年を迎えるに当たり、恒例によりまして、一言ご挨拶申し上げます。この1989年が会員の皆様にとっても私たちのOR学会にとっても、大いなる発展の年であることを、まず祈念致したいと存じます。

私たちのOR学会は、創立以来、急速には申しませんが、着実に発展してまいりました。それは、会員数の増加を見ても、論文誌・本誌や研究発表会の充実ぶりを見ても、あるいは研究部会の多様さや熱心さを見ても、いずれの面からも裏づけられると思います。しかし、本学会の研究普及活動は、その多様さや質を一層高め、さらにスピードアップすることを広く期待されております。年頭のご挨拶を申し上げる機会に、このことを会員の皆様に強く訴え、ご協力をお願いしたいと存じます。

と申しますのも、ここ数年われわれを取り巻く環境の変化、特に情報の処理や蓄積・伝達等のインフラストラクチャの整備充実には目を見張るものがあります。当然、それはオペレーションズ・リサーチの活躍の場を飛躍的に広げていると申せましょう。最近の本誌を見ましても、それに応えて、新しいホットな分野で、ORの成果を挙げている例がしばしば紹介されておまして、まことに喜ばしい傾向であると存じます。今年も、従来にも増して、より充実した研究成果が誌面を飾ってくださることでしょう。しかし、飛躍的に広がったすべての活躍の場で、ORがその成果を誇示するのは並大抵ではありません。研究の多様化、高速化、高度化が望まれる所以です

さて、昨年「年頭挨拶」で、刀根教授は「O

Rは役に立つ実学であるとともに、ベーシックな学問であり、それゆえこれからも大きな発展の約束された最もエキサイティングな学問である」と述べられています。そして、オペレーションズ・リサーチの大発展のためには、「実務家と理論家の緊密な協同作業が効果を上げるはずなのに、しかもわれわれのOR学会にはその両者がバランスよく参加しているのに、その結びつきがまだ弱いのは大きな機会損失である」と指摘され、「今年を両者の交流元年に」と呼びかけられました。

私も全く同感です。そして、会長に就任してからもう3/4年が過ぎようとしていますのに、まだそのための具体的な手を打てないでおりますことは、全く怠慢の誇りを免れないと思っております。「交流元年」と胸を張って言えるためには、その成果が期待できるような素地が作られなければならないでしょうし、そのためには学会として何等かの方策を実行しなければならないでしょう。遅ればせながら、両者の交流の活発化を促すために役立ちそうな方策のいくつかを、今年には実行に移したいと念願しております。

「実務家と理論家の交流を」と呼びかけてもなかなかその実が上らないのは、1つには、それぞれが忙しい毎日を送っているからだと思えます。ですから、その忙しい方々のいくつかの仕事の中で、学会での交流や協同研究の推進には高いプライオリティを与えていただかなければならないでしょう。もともとOR学会に参加している会員の皆様ですから、協同研究に参加したいという意欲はお持ちだろうとは思いますが、直接、目の前の

仕事の処理に役立つようになかったり、時間のかかる新しい仕事を背負い込みそうであったりしますと、ついおっくうになってしまうのは人情でしょう。それで、少し長い目で見ればその協同研究に参加した成果がメシのタネになりそうだという程度のメリットが感じられでもすれば別ですが、単なる知的興味といった程度ではなかなか踏み切れないのだと思われます。

しかし、もし、未知の協同研究の危険を避け、理論家は理論家だけで理論の精緻化にのみ努力を傾注し、実務家は理論の新しい発展を取り入れようとせず、「理論は実務には役立つ」とそっぽを向くようになったとしたら、それこそORは自滅し、OR学会も解体に追い込まれてしまうでしょう。ORをベーシックな学問として発展させつづけ、実務に役立つ実学としての地位を保ちつづけるために、今こそ、志ある会員のご協力を得て、学会内交流の風潮を確立しなければならぬと思います。まずは、うまい知恵をお教えください。そして、ぜひ「学会内交流」にご参加ください。

昨年は、APORSの第1回会議がソウルで開かれ、私たちの日本オペレーションズ・リサーチ学会からも50人を超える多数の会員が参加して研究発表をされ、会議の成功に大きな寄与をされたと伺っております。また、日本で開かれた国際数理計画法シンポジウムは、それこそ世界のこの分野

の第一線の研究者をすべて集めて、予想以上の規模で、中身の濃い会議であったと聞いております。円高の時期に、オリンピックを横目で見るような形で企画された日本での会議でしたから、果たして外国から多数の参加者があるかを関係者はご心配になられたようですが、最もホットな研究成果が並べられ、会いたい人には全部会えるような会議であったということですから、出席することのメリットが大きく、これが700に近い多数の参加者を呼び集めた原因であったと思います。

このことは、前述の「学会内交流」にも、ひいては日常の学会活動にもそのまま当てはまる教訓ではないでしょうか。研究発表会がだんだん盛会になってきたとはいえ、今のところ、参加者数は全会員の2割には達していません。OR学会の研究発表会に参加しないと気が休まらないという気分を全会員が持つようにしたいものです。

昨年は本学会にとって初めての経験がありました。それは研究発表会の日本経営工学会の大会との同時開催です。合同懇親会を含め、近隣学会の研究に身近に接する機会を得たことは、私たちにとって有意義な経験であったと思います。この経験を今年をもっと活かしたいものです。「学会内交流」「国際交流」という昨年の刀根教授の呼びかけに今年は「学会間交流」も加えさせていただいて、1989年の年頭挨拶とする次第です。

* * * * *